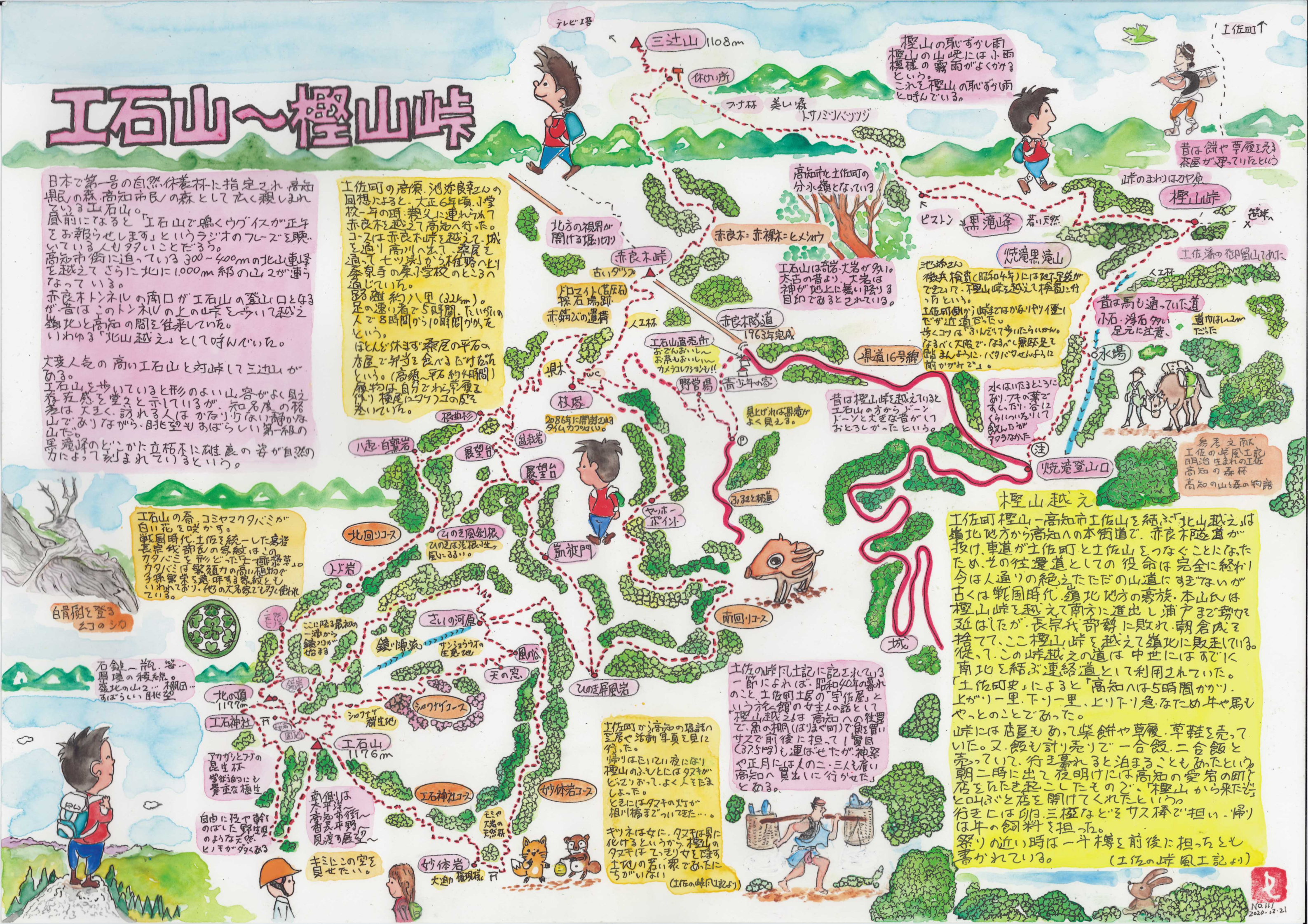
工石山～樫山峠

日本で第一号の自然休養林に指定され高知県民の森・高知市民の森として広く親しまれている工石山。
昼前になると「工石山で鳴くウグイスが正午をお報らせします」というラジオのフレーズを聴いている人も多いことだろう。
高知市街に迫っている300～400mの北山連峰を越えてさらに北に1,000m級の山々が連なっている。
赤良木トンネルの南口が工石山の登山口となるが、昔はこのトンネルの上の峠を歩いて越え嶺北と高知の間を往来していた。
いわゆる「北山越え」として呼んでいた。

大変人気の高い工石山と対峠して三辻山がある。
工石山を歩いていると形のよい山容がよく見え存在感を堂々と示しているが、知名度の格差は大きく訪れる人はかなり少ない静かな山でありながら、眺望もすばらしい第一級の山だ。
黒滝峰のどこかに立枯木に雄鹿の姿が自然の力によって刻まれているという。

工佐町の高須・池添良幸さんの回想によると、大正6年頃、小学校一年の頃親父に連れられて赤良木を越えて高知へ行った。
コースは赤良木峠を越えて城を過ぎ高川へ出て、桑尾を過ぎて「七ツ塚」から柱路へ上り春泉寺の桑ノ学校のところへ通じていた。
路程約八里(32km)。
足の速い者で5時間、たいていの人で8時間から10時間かかったという。
ほとんど休まず桑尾の平石の店屋で弁当を食べるだけだったという。(高須～平石 約4時間)
履物は自分でわらぞうりを作り横尾にタクシーの足を洗っていた。



工佐町の池添良幸さんの回想によると、大正6年頃、小学校一年の頃親父に連れられて赤良木を越えて高知へ行った。
コースは赤良木峠を越えて城を過ぎ高川へ出て、桑尾を過ぎて「七ツ塚」から柱路へ上り春泉寺の桑ノ学校のところへ通じていた。
路程約八里(32km)。
足の速い者で5時間、たいていの人で8時間から10時間かかったという。
ほとんど休まず桑尾の平石の店屋で弁当を食べるだけだったという。(高須～平石 約4時間)
履物は自分でわらぞうりを作り横尾にタクシーの足を洗っていた。

樫山越え

工佐町樫山－高知市工佐山を結ぶ「北山越え」は嶺北地方から高知への本街道で、赤良木隧道が抜け、車道が工佐町と工佐山をつなぐことになったため、その往還道としての役命は完全に終わり今は人通りの絶えたただの山道にすぎないが古くは戦国時代、嶺北地方の豪族・本山氏は樫山峠を越えて南方に進出し浦戸まで勢力を延ばしたが、長宗我部勢に敗れ、朝倉城を捨てて、ここ樫山峠を越えて嶺北に敗走している。
従って、この峠越えの道は中世にはすでに南北を結ぶ連絡道として利用されていた。
「土佐町史」によると「高知へは5時間かかり、上がり一里、下り一里、上り下り急なため牛や馬もやっとのことであった。
峠には店屋もあって柴餅や草履、草鞋を売っていた。又、飯も計り売りで一合飯、二合飯と売っていて、行き暮れると泊まることもあったという。
朝二時に出て夜明けには高知の愛宕の町で店をたたき起こしたもので、「樫山から来たぞ」と叫ぶと店を開けてくれたという。
行きには炭、三極などをサス棒で担い、帰りは牛の飼料を担った。
祭りの近い時は一斗樽を前後に担ったとも書かれている。
(土佐の峠風土記より)

土佐の峠風土記に記されている一節によれば、昭和40年の暮れのこと、土佐町土居の「宇佐屋」という旅館の女主人の話として「樫山越えは高知への往還で、魚の棚(ぼうぜ町)で魚を買いサスで前後に担って1貫目(3.75kg)も運ばせたが、神祭や正月には人の二・三人も雇い高知へ買出しに行かせた」とある。

土佐町から高知の取話の宝居や活動写真を見に行った。
帰りはたいてい夜になり樫山のふもとにはタヌキがどっさりおって、よく人をたましよった。
ときにはタヌキの灯が相川橋までついてきた…。
ギツネは女に、タヌキは男に化けるというが、樫山のタヌキはてっきり女をたぶらかす若い衆であったにちがいない
(土佐の峠風土記より)

No.111
2020.12.21